



彙報 : 2023年度海港都市研究センターの活動

(Citation)

海港都市研究, 19:78-79

(Issue Date)

2024-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100488387>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100488387>



彙報

2023 年度 海港都市研究センターの活動

2023 年度の海港都市研究センター（以下、海港センターと略称）では、大学院人文学研究科における共通科目授業の開講、韓国海洋大学を中心とする WCMCI 国際学術大会の主催、イスラエルによるガザ・ジェノサイドに抗議し、ガザを支援する趣旨の映画上映・討論会の開催、北京大学・復旦大学・神戸大学の三大大学フォーラムの主催、紀要『海港都市研究』第 19 号（最終号）の刊行等の諸事業を行った。

1 一大学院人文学研究科共通科目の開講

今年度は前期に大学院博士課程前期課程の大学院生向けに「海港都市研究交流演習」、博士課程後期課程の大学院生向けに「海港都市研究企画交流演習」を開講した。

両授業では樋口教授を中心に、移動・越境に関わる諸状況をテーマとして、受講生が自ら選択したテキスト（翻訳を含む）について研究発表を行い、受講生全員で討議するというスタイルをとった。なお、7 月 24 日に関西学院大学の大橋毅彦教授を非常勤講師としてお招きし、1940 年代上海の文化状況について多面的に紹介いただいた。

2 一WCMCI 国際シンポジウムの神戸大学主催

2023 年 10 月 21 日・22 日の二日間、「2023 東アジア海港都市国際学術シンポジウム」および「第 13 回

WCMCI (The World committee of Maritime Cultural

Institutes) 国際会議「東アジア海域史の新視点」を重

ね合わせる形で、神戸大学主催の国際会議を 10 月 21 日・22 日の二日間、瀧川記念館で開催した。海外からは韓国海洋大学、中国海洋大学、台湾中央研究院、国内からは長崎大学の研究者が参加し、神戸大学からも社会学・日本文学の大学院生が研究発表を行った。WCMCI の枠組みでの国際会議を神戸で開催するのはほぼ 10 年ぶりであったが、その間の世代交替や財政難その他の障害にもかかわらず、各パートナー大学との関係を持続できていることには大きな意義があると考えている。また、本学西洋史教育研究分野の修了生である雪村加世子・大阪産業大学准教授の多大な協力を得たことを特記しておきたい。

3 一ガザを支援する映画上映会・討論会の開催

2023 年 12 月 7 日、10 月以降続いているイスラエルによるパレスチナ・ガザ地区へのジェノサイドに抗議する緊急企画『映画『ガーダ パレスチナの詩』上映と共同討議』を開催した。前半、古居みずえ監督のドキュメンタリー映画『ガーダ パレスチナの詩』を上映し、後半、アラブ文学研究者で早稲田大学の岡真理教授にオンライン出演いただく形で質疑応答を行った。討論の中で、この出来事を西洋の植民地主義の現在形として把握することの重要性、および日本を含む欧米のメディアの責任に関する指摘が強い印象を残した。

4 一三大大学フォーラムの主催

2024年1月20日・21日の二日間にわたって。第5回神戸・北京・復旦大学人文フォーラム『ポストパンデミック期の東アジア人文学』が神戸大学の主催で行われた。2018年に北京大学で開始したこのフォーラムは2020年からオンラインに移行していたが、四年ぶりに対面で、海港都市研究センターの行事として開催した。北京からは9人、復旦からは8人の参加があり、神戸大学からは12人が参加して中国文学、日本文学、英文学、社会学、藝術学、言語学の諸分野から報告があり、日中英の多言語で活発な討論がなされた。

5－『海港都市研究』第19号（本号）の刊行

2023年3月、当センターの紀要『海港都市研究』第19号を刊行した。

6－終刊の辞

2023年11月、センター長の樋口による動議を経て、海港センターを発展的に解消すること、大学院共通科目を2024年度をもって終了し、当紀要は今19号を持って最終号とすること、三大大学フォーラムやWCMCI国際シンポジウム等のプロジェクトは、人文学推進インスティテュートの枠組みの中で継続すること、等の方針を決定しました。

海港センターは2005年、社会学の佐々木衛教授を初代の代表とする形で発足、東洋史の森紀子教授、緒形康教授、西洋史の天津留厚教授、日本史の奥村弘教授、地理学の藤田裕嗣教授等の積極的な協力のもと、一時は日本財団からの助成金も獲得し、グローバルCOEの申請計画の中核に位置付けられる等、人文学研究科の代表的な共同研究組織の一つとして存在感

を発揮しました。2007年度の人文学研究科への改組以降は、大学院共通科目を担当し、紀要を編集・刊行し、毎年一回、東アジアのパートナー学術機関と組んで国際会議を主催・共催しました。その過程で社会学の金貞蘭さん、具知瑛さん、権京仙さん、黄嘉琪さん、日本史の添田仁さん、西洋史の雪村加世子さん等、多くの若手研究者の成長をサポートすることができたように思います。

しかしながら他方、特定分野の若手研究者に経験を積ませ、キャリア戦略をサポートすることや、上記の国際的なネットワークを維持することを重視した結果、組織としての研究成果を充分に出せないまま、この数年は深刻で慢性的なマンパワーの不足に悩まされ続けていました。他方、2023年度現在の人文学研究科では、既存の共同研究組織の外側に新たに若手中心の研究グループが複数立ち上がっており、その中には海港センターが扱ってきたテーマと重なりつつ、より広い範囲をカバーするようなものも生まれています。以上の状況に鑑み、海港センターの発展的解消を含む、人文学研究科内における共同研究組織の組み替えを行うことが、今後の研究科にとって効果的な選択肢であろうと考えるに至った次第です。

この場を借りて、これまで海港センターの活動に協力いただいたすべての方々、および当紀要を閲覧いただいたすべての方々に深く感謝申し上げます。海港センターが扱ってきた、海港都市の文化史や、移民・難民に関する問題系は、現在もその重要性をいささかも減じてはいません。今後はこれまでとは別の形で、それらの探究を続けることになると思います。

長い間、たいへんありがとうございました